

# 社会を変える医師に

# Case Study

## 地域医療のカタチ 新潟県



新潟県は人口約220万人で、全国15位の人口数を誇るが、2022年時点の人口10万人当たりの医師数は227.3人(全国平均は274.7人)と全国で4番目に少なく、医師偏在指標も低い。この厳しい状況を打破するため、新潟県では前・福祉保健部長である松本晴樹氏を中心に改革が進められ、2022年4月に【イノベーター育成臨床研修コース】をスタートさせるなど、独自の施策を行ってきた。それらの取り組みは着実に実を結び、2024年度に新潟県が受け入れた研修医数は161人となり、これまで最多だった2023年度の147人を上回り、全国下位の医師数ではあるものの研修医数は過去最多を更新し続けている。今、新潟県は臨床研修において最も魅力のある場所といっても過言ではない。新潟県福祉保健部長の中村洋心氏と、【イノベーター育成臨床研修コース】を受講している千手孝太郎氏による対談を開催し、“唯一無二”の施策や取り組みが生まれる新潟県の強みに迫った。

### 研修医の声

新潟には縁もゆかりもありませんでしたが、県庁インターンを通じてイノベ枠が面白そう！と引きつけられました。その中でも、先生方はもちろんコメディカルの方々も含め「病院全体で研修医を育てよう」という雰囲気の上越総合病院を選びました。実践に直結する勉強会と心強いサポート下での経験を積み重ね、診療に少しずつ自信が持てるようになりました。また、新潟県では研修医向けの勉強会が多く開催されており、院外の仲間たちとも交流しながら技術や考え方を学ぶことも魅力の一つです。新潟の先生方は、医師不足のこの地域の医療を守るため、私たちが即戦力になるべく教育にも力を入れてくださるので、それに応えたいと頑張っています。

上越総合病院 初期研修医 1年目

西尾 実華 Mika Nishio

出身地：東京都 出身大学：東北大学（2024年卒）



### 独自の研修コースが魅力 “知れば面白い”新潟県

**千手**：2025年度からの臨床研修医のマッチャー数は139人と、前年度の119人より20人も増えたと聞きました。1年で20人もマッチャー数が増えたのはすごいことだと思います。

**中村**：昨年の161人の研修医のうち、42人が2次募集以降に新潟県に興味を持ってくれた方でした。彼らと話をしたところ、マッチングでアンマッチになっただ後にいろいろと情報を集めて、初めて新潟県が「こんなに面白

いことをしているんだ」と知り、応募された方が多かったことが分かりました。新潟県の臨床研修は、知れば面白い！ですから、それが口コミやメディアなどを通して全国に少しずつ浸透してきた結果がマッチャーの増加につながったのだと思います。

**千手**：僕も最初は新潟県の研修制度について知りませんでした。希望していた名古屋の病院がアンマッチになってしまい、全国の病院から研修先を探していたとき、新潟県が主催する「ionni」（研修病院選定をサポートする個別相談）で初めて知ったんです。

【新潟×有名病院（関東・関西・九州・沖縄等）たすぎがけプログラム】で、アンマッチになってしまった病院にたすぎがけで研修に行けることや、変革力を養うことができる【イノベーター育成臨床研修コース】といった他県にはないコースにも惹かれ、新潟県で研修をしようと決めました。知れば面白い！はまさにその通りでしたね。

**中村**：新潟県の面白さを知ってもらおう取り組みの一つとして、「県庁インターン」があります。医学生や研修医が新潟県庁で行政医（公衆衛

厚生労働省 医系技官  
新潟県 福祉保健部長

中村 洋心 Yoshin Nakamura

2011年東北大学卒業。初期研修を経て小児科へ。2014年4月に厚生労働省に入省し医系技官に。健康局総務課、医政局総務課を経て、2017年4月から茨城県古河保健所長、2018年1月に厚生労働省に戻り、救急・周産期医療等対策室長を経て、2023年8月より新潟県に。現在に至る

# “唯一無二”の研修コースとフィールドで、

Interview\_ドクターズマガジン編集部 Text\_田口素行 Photograph\_緒方一貴

生医)の仕事を経験でき、臨床教育に重きが置かれている医学生にとって行政医の仕事を知る機会は貴重です。全国からインターンに参加された方々がそれぞれの場所に戻り、新潟県の取り組みや臨床研修のユニークさなど、新潟県の魅力を全国に広めてくれる契機にもなっています。

**千手**：僕も臨床研修の自由選択期間に「県庁インターン」を利用して、1カ月間県庁職員として働かせていただきました。臨床をしていると、医療制度や公衆衛生など社会的な問題で壁にぶつかることがあります。県庁の仕事を通じて、地域医療構想や医療制度の仕組み、地域の医療課題を当事者意識を持って深く理解でき、臨床にも大きく生かされています。

**中村**：臨床医として働いている中で、医療制度ができた背景や行政の思考プロセスを理解していると役に立つ場面が多い。そういった視点は必ず武器になると思います。

**千手**：全国から県庁インターンに来た医学生から、「アクセスも良く、住みやすいですね」といったポジティブな言葉や、臨床研修でも面白い取り組みがあると知って、「ここで研修をしてみたい」という声も多く聞きました。

新潟県の魅力を実感してもらうには非常に良い機会になっていると思います。

**中村**：医学生や若い先生方に新潟県の魅力を実感していただくことが重要なんですよね。私は「医師の困り込み」や「医師確保」という言葉はあまり好きではなく、独自の取り組みなどで、新潟県に自然と集まってもらえるような魅力をつくりたい。ここで「医師として成長できる」「自分が目指す医師像を実現できる」「やりがいも大きい」ということを実感してもらい、初期研修後にも新潟県に残りたいと思える環境を整える。それが私たちの取り組むべきことだと思っています。

## 医師として活躍するための課題解決力を修得

**千手**：新潟県の魅力の一つである「イノベーター育成臨床研修コース」は僕も受講しており、臨床研修と並行しながら、県内の病院が困っていることや地域の医療課題の解決に向けて

チームで取り組んでいます。2024年には第1期生が修了し、3月には修了式の様子がメディアに取り上げられるなど、全国的にも大きな注目を集めました。

**中村**：このコースでは、臨床研修と並行して、物事を多角的に捉える視点や課題を体系的に整理し、論理的かつ創造的に解決策を導き出す思考力、また、他者と協働し変革を実現するリーダーシップなど、多様な社会の課題を解決する力を育むための

講義を提供しているほか、学んだ知識やスキルを現場で活かすために、新潟県の医療や病院の課題を公募し、課題に対して研修医のチームが解決に向けて取り組むプロジェクトワークの機会を提供しています。

**千手**：私のチームでは津南町立津南病院の課題に取り組んでいます。現在津南病院では、コースの第1期の修了生2人が週の半分を津南病院で、半分は東京などでコンサル業を行うダブルワークという新しい勤務形態を実践しており、こちらも大きく注目されています。津南病院は過疎高齢化が深刻な人口8500人を支える町立病院で、慢性的な医師不足が大きな課題です。特に若手医師に来てもらうことは難しく、その一つの解決策がダブルワークによる勤務なんです。依然として課題は多く、実際に津南病院の院長から課題を伺い、病院と僕たち

社会医療法人  
新潟勤労者医療協会  
下越病院  
初期研修医2年目

千手 孝太郎 Kotaro Senju

2023年関西医科大学卒業。初期研修1年目をたすぎがけで名古屋徳洲会総合病院で研修。2年目の現在、下越病院で研修中。初期研修と並行して、初等教育にも興味を持ち教育学部へも進学。自身の趣味が高じ、狂言師としても活動中

# Case Study

地域医療のカタチ 新潟県

## ールドで、社会を変える医師に

研修医チーム、勤務されている修了生の先生、津南町とも共同し、大きなチームとして課題解決に向けて取り組んでいるところです。

**中村**：地域医療の課題を、新潟県に集まった臨床研修医たちが解決していく。そのサイクルができたらいなと思っています。津南病院以外にも、佐渡総合病院のオンライン診療、上越地域における医療連携、産前産後ケアサービスをを行うスタートアップ企業が抱える課題に対して、4つのチームに分かれて取り組んでいるところです。昨年のプロジェクトワークでは佐渡総合病院の働き方改革をテーマに、研修医チームが考えた改善策を病院で実践し、外来の時間短縮に成功したことがテレビでも紹介されました。成果もしっかりとカタチに現れています。

### 新潟県の“風土”だからこそ生まれた、唯一無二の研修

**千手**：新潟県では、県内の自治体と病院が連携し、地域で臨床研修をしながら米国ハーバード大など海外大学院の学位取得に向けたチャレンジを支援する「オンライン海外留学支援制度」や、他にも「国際保健コース」「産

業医資格取得コース」といったコースを選択することができず。なぜ他県にはない全国初のコースや取り組みが実現できるのでしょうか。

**中村**：県庁職員の意欲が高く、また県内の各病院が非常に協力的で、そんな新潟県の「風土」が土台にあるからこそ、実現できるのだと思います。例えば「ペーター育成臨床研修コース」は前例がないため、そもそも臨床研修のプラットフォームとして修得すべき価値のあるものなのか、講義、プロジェクトワーク、講師をどうするのかなど、全てをゼロから考える必要があり、相当な労力を県庁職員たちが費やしてきました。その原動力となつたのは、若い先生たちにとって価値のあるものを提供したいという熱意です。職員自身もこのコースを「面白い」と思っている

ので、研修医がどう学び、どう成長しているのを見ながらコースをより良いものへとブラッシュアップし、研修医と共に自分たちも成長できることにやりがいを感じています。

**中村**：新潟県では、研修3年目以降も県内に残っていただけの医師を増やすため、専門研修の魅力向上やSNSによる情報発

信にも力を入れていくところです。

**千手**：医師不足解消には研修3年目以降に定着していただくことが重要になりますよね。

**中村**：医師不足は裏を返せば、「若手が成長できる場が豊富にある」という点で、ある意味、新潟県の魅力なんです。医師不足だからといって新潟県は医療の質が低いのかというと、全く違います。一人当たりの医療費が極めて低い中で、新型コロナウイルス感染症の人口100万人当たりの死亡者数は全国で一番少ないなど、アクセスの課題はありますが、医療水準は決して低くないといえると思います。その要因として、新潟県は医療リソースが少ないため、自分事化しやすく、医師一人一人が「自分がやらなければ」という責任感を持っていることにあります。さらに新潟県は医師の年齢構成が高く、経験豊富な医師が多いことも医

療の質の高さにつながっていると思います。逆に言うと、新潟県は医師の高齢化も課題であり、新潟県に残る若い先生が増え、引退される先生方が蓄積されてきた医療の質の高さをうまく引き継ぐことができる流れをつくりたいですね。

**千手**：熱意もそうですし、研修医一人一人を大切にしてください。人の優しさも新潟県の風土



中村 洋心 Yoshin Nakamura

出身地：栃木県  
出身大学：東北大学（2011年卒）





# “唯一無二”の研修コースとフィ

だと感じています。新潟県主催の「1-on-1」で自分の研修希望を話した際、普通なら新潟県の病院を強く勧めるのに、県外の病院もいくつか紹介してくださいました。そのとき、新潟県は研修医を囲い込むようにしているのではなく、個別のキャリアを真剣に考えてくださっているのだと感じました。「イノベーター育成臨床研修コース」でも個別面談やメンタリングの機会があります。新潟県は、「自分のことをしっかりとみてくれる」「自分のキャリアを真剣に考えてくれる」、そんなところも大きな魅力です。

**中村**：新潟県では、県全体で研修医を育てることを大事にしておられ、県内23の全臨床研修病院の院長と新潟県との合同の連絡会議を毎月行い、臨床研修医の採用、育成、その後のキャリアパスについても話し合っています。  
**千手**：全ての臨床研修病院の院長が毎月集まる機会があることを他では聞いたことがないですし、会議には僕も参加したことがあります。各病院の院長が積極的に発言され、県全体として研修医のために頑張っているという熱い思いを感じました。病院同士は患者さんも人材も取

り合いになるため不仲になりがちですが、新潟県は全く違います。各病院が非常に協力的で全病院が足並みをそろえることができ、環境だからこそ、他では真似することが難しい独自の取り組みが実現できるのだと思いました。

僕も新潟県に来る前は、医師数が少ない、イコール、研修の質が低いのでは？と頭をよぎったこともありましたが、実際はその逆で、指導やフィードバックがきめ細かく丁寧で、かつ、自主性を尊重してくださるなど、研修の質は高いです。また、新潟県は他とは違い、町の人々の距離が非常に近いという印象があります。僕は土日に、ゴミ拾いのボランティアや町のイベントスタッフとして住民と積極的に交流をしています。僕のことを「あの病院の先生だよ」と認知されることも増えてきました。新潟県は、病気を診るだけでなく、人と地域をまるごと診る能力も獲得できる最良の環境にあることも魅力だと思っています。

## 自分事化できるフィールドで社会問題を解決できる医師に

なっています。患者さんを取り巻く社会や生活全体も診る視点が不可欠で、新潟大学でも総合診療力を持つ医師の育成に注力しているところなんです。医学生や若い先生方には、社会の現状を見据えながら、自分の役割を考え、実践してほしいです。新潟県には、地域課題を、自分事化して取り組めるフィールドや独自の臨床研修コースが用意されています。地域社会から必要とされ、将来にわたって活躍できる医師へと成長できる環境がどこよりも揃っていると思います。

**千手**：新潟県では、「自分が何とかしなければ」「何をすれば患者さんのためになるのか」を真剣に考えることができる、そして、僕たちのチャレンジを支えてくれる病院があり、その病院を支える新潟県という心強い存在があります。僕は新潟県に縁もゆかりもありませんが、新潟県なら自分の目指す医師像に向かって安心して飛び込むことができます。研修3年目も新潟県に残り、地域医療の課題を解決して社会を変えることができます。総合診療医を目指したいと思っています。

誠さんが、「課題を解決するためには1ミリずつでも動かすことの難しさは、実際に行動している人にしかわからない。それでもただ「不十分」や「もった根本的」だけ指摘することに比べてはるかに大きな価値がある。自分は評論家ではなく、実践者でありたい」と述べられていた言葉をずっと胸に刻んでおり、若い医師の方々にも紹介しています。医師不足や地域医療の課題など、新潟県にはまだまだ解決すべき問題が山積していますが、不十分だとわかっているにもかかわらず1ミリかもしれないけれど、それでも前に進もうとする姿勢こそが、新潟県や日本の医療をさらによくしていくはずだと考えています。皆さんにも、1ミリの大切にする実践者としていてほしいですし、そのためには、社会の課題を自分事として捉えられるかどうか重要です。社会は自分の行動で変えられますし、自分の未来を切り拓くのも自分自身です。新潟県には、その実践を支えてくれる環境があると思います。



### INFORMATION

新潟県医師・看護職員確保対策課  
〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1



医師ナビにいがた 検索



千手 孝太郎 Kotaro Senju

出身地：兵庫県  
出身大学：関西医科大学（2023年卒）